

米国産牛肉の輸入問題

感情論を排し再開すべき  
食べるか否かは個に委ねよ

医薬品医療機器総合機構  
新薬審査第三部主任専門員

池田 正行

1990年から2年間、私は英国に滞在しました。当時、英国でBSE(牛海綿状脳症)が大発生しましたが、英政府は「人には感染しない」との見解を示しており、安心して牛肉を食べていました。しかし、96年3月に、英政府がBSEが人にうつる可能性を認めました。以後、日本人の中ではBSEによる発症の可能性が高い人間として、BSEについて勉強してきました。

「1億総始皇帝」の心理

こうした立場から、2003年12月24日に起きた米国産牛肉の輸入停止措置に始まる今回のBSE騒動に対する日本の一連の動きを見てみると、科学ではなくて感情で動いているとしか思えません。理由は2つあります。

1つは、これは私が勝手に名づけたのですが、「1億総始皇帝」という日本人の心理状態です。

秦の始皇帝は不老長寿の薬を求めたことで知られています。この心境と今の日本人は同じで、「永久に健康でありたい」と強く願っています。この象徴が、抗菌グッズとか、1999年にベストセラーになった『買ってはいけない

ご意見は編集部まで

掲載しました池田正行氏の「異論正論」に関して、ご意見を編集部にお寄せください。ご意見の投稿方法は156ページの「レターズ・編集部から」欄を参照ください。

い」(金曜日刊)とかでしょう。

日本は非常に豊かで恵まれています。だから、ちょっとした汚れに対して嫌だと拒否反応を示すのです。もし、食うや食わずの状態だったら、誰も牛肉の輸入停止を支持しないでしょう。

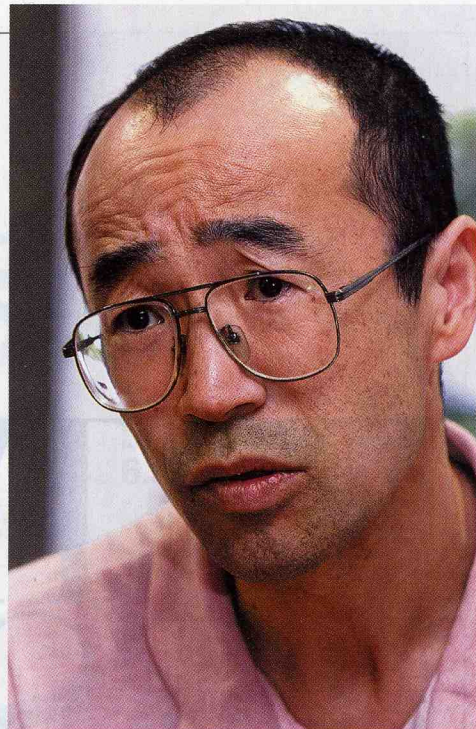
もう1つは、反米感情です。米国の国際的な行動に、米国以外のあらゆる国の民衆が反感を持っています。今回のBSE問題は、この2つの感情が表に噴出するよい機会だったのです。

ただ、人は誰しも「あなたは感情で動いている」とは言われたくありません。そこで、全頭検査うんぬんという話が出てくる。「自分は科学や理屈、理性で動いているんだ」と自身で納得したいわけですから。本当は、全頭検査で月齢20カ月以下は安心だなんて話は、どうでもいいんです。この問題の本質は感情ですから、科学者や官僚では解決しようがありません。政治家の決断にかかっています。

では、どうすればいいのか――。

私は、まず輸入を再開すればいいと考えています。そのうえで、米国での規制や、生産・流通のコンプライアンス(法令順守)などを議論していく。米国産牛肉ボイコット運動、大いに結構です。牛肉を食べたくなければ食べなければいい。その人の意思で食べないんですから、「あなたは科学が分からない」と言って攻撃するつもりは全くありません。

大事なことは、拒否する人と受け入れられる人、いろいろな考えがあるということです。日本が輸入を再開した場合



池田 正行(いけだ・まさゆき)氏

1956年4月東京都生まれ、48歳。82年、東京医科歯科大学医学部卒業後、関東通信病院、国立精神・神経センター神経研究所、旭中央病院を経て、90年から2年間、英グラスゴー大学ウェルカム研究所主任研究員を務める。帰国後、国立犀潟病院臨床研究部で診療に従事、2003年7月から現職。

に、90%の消費者が拒否したとしても、それはそれで構わないんじゃないでしょうか。

物事をデジタル化して考えるな

今の世は、問題をオール・オア・ナッシングというデジタル的な思考で解決しようとしています。輸入を始める前にデジタルで決着をつけようとするから解決の糸口が見えなくなる。

日本人も自分で判断し、米国産牛肉を食べる人もいるし、食べない人もいるというように、行動の多様性を認める必要があります。それが成熟した文化であり、社会の姿のはずです。

日本は、事あるごとに行動の画一性を重視し、それにそぐわぬ者は「非国民」と言わんばかりに世論を作り上げてきました。それは未熟な文化、社会です。BSE問題も、全頭検査の無用論や米国産牛肉の輸入再開を主張する人が非国民扱いされているという点で、何ら変わりません。